PROJECT

現代の実践＝知環境における呪術

文
川田牧人

共同研究 ● 呪術的実践＝知の現代的位相──他の諸実践＝知との関係性に着目して（2014-2017）

共同研究の出発点

現代世界における知識と実践の諸環境において、呪術はいかなる位置をしめ、また有効性を発揮しうるのか。このような問題意識を掘り下げるため、本研究では「実践＝知」という複合語（感覚を含む行為と、知識・信念の双方にわたる作業仮説的な概念）によってあらわされるような視角から現代世界における呪術を捉え、呪術的実践＝知が科学や宗教、医療など近代によってもたらされたとされる呪術以外の実践＝知といかなる並存状況を生成させているのか、また、そのような並存状況はいかにして現代世界を構成しているのかを考えたい。

伝統医療の治療師の触診を受ける乳児（1996 年２月、ヴァヌアツ・トンゴア島、白川千尋撮影）。

本研究はこれに先立つ共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」（2007 年度 10 月～ 2009 年度、研究代表者：白川千尋［当時国立民族学博物館、現大阪大学］）を継続的に発展させようとするものである。そこでは「とわかっている、でもやはり」というオクターブ・マノーニの有名なフレーズを手がかりに、言葉の領域と行為の領域を架橋する営みとしての呪術に光をあて、「呪術とはなにか」という核心の問いに迫ろうとした（白川・川田編 2012 参照）。本研究は、そこから生まれた次のような新たな課題に取り組もうとするものである。ひとつには、呪術的諸実践に隣接する科学、医療、宗教、教育などの諸実践との関係性という課題であり、これが本研究の中心眼目であることは、「他の諸実践＝知との関係性」というやや据わりの悪い副題をあえて用いていることにも示されている。上記のような諸実践＝知は、呪術という前近代を精算しきってしまうというおおかたの予測に反して、現代世界ではこれら諸実践＝知が呪術と同居／並存／混在するなかで、その存在や意味がせり上がってくる、いわゆる「呪術が近代を生む」という状況が生じている。このような状況から呪術の根源的な意義を問うことが、本共同研究のひとつの課題である。

いまひとつはこれら諸実践との関係性という観点から、触知性や物質性といった感覚特性についてさらに掘り下げることであり、呪術が実際に生成・展開する微細な場面を当事者の視点から分析することに取り組む。この点に関しては、前回の共同研究では言葉と行為、すなわち「知る」と「行なう」という活動領域を焦点化したが、それをさらに微分して、人間の諸活動を「知る／信じる／行なう／感じる」という４つの領域において捉えるという課題が生じる。このような知的・心的・感覚的な複合領域において呪術を捉え直すことによって、かつての呪術のモダニティ論が「近代が呪術を生む」側面を見ようとしたのに対し、それの逆の側面から、近代と接することによって、呪術的実践＝知がわれわれの生活をいかに組み立てているかを解明したい。

研究会での議論から

以上のような初発の問題関心が実際の研究活動においてどのように展開していくか、初年度の研究会における議論からいくつか紹介したい。白川千尋は「呪術と科学の違いに関する省察」と題して、マラリアの原因を事例にあげながら両者の間にある差異について考察した。科学（医療）が提示する説明には基礎医学的原因（マラリアの感染メカニズムを説明する）と臨床医学的見解（なぜマラリアにかかってしまったかを説明する）の２つがあり、両者が環流するという特徴が見いだせる。それに対し呪術による説明は「なぜ」に答える形に傾斜しており、当事者としての立場や、その立場からの意味づけや重要性が前景化する。ここに、「どのようにして」の問いに答えるものとしての科学に対し、「なぜ」の問いに答えるものとしての呪術という対比が描かれることになる。ただしこの差異は当事者が何を期待しているかにも左右されるのであって、当事者にとっての呪術／科学の区別や関係性にも留意が喚起された。

近藤英俊（関西外国語大学）は、浜本満の近著『信念の呪縛』（2014）を詳細に検討しながら、言葉を媒介とする物語からはみ出てしまう不可解で理不尽なものへのアプローチを「偶然的他者の呪術的〈再必然化〉」という観点から検討した。彼はナイジェリアでの自身の滞在先の家主と彼を含む店子との関係に妖術や呪いが介在したという事例をとりあげ、言動に理不尽さや異常さを示す店子は、大家の常識では捉えきれない、そうである必然性のないものとして、つまり偶然性をもった他者として立ちあらわれる点に着目する。そして偶然性のもつ不可解さや理不尽さを意味づけ対処可能なものにし、偶然性を再必然化するの

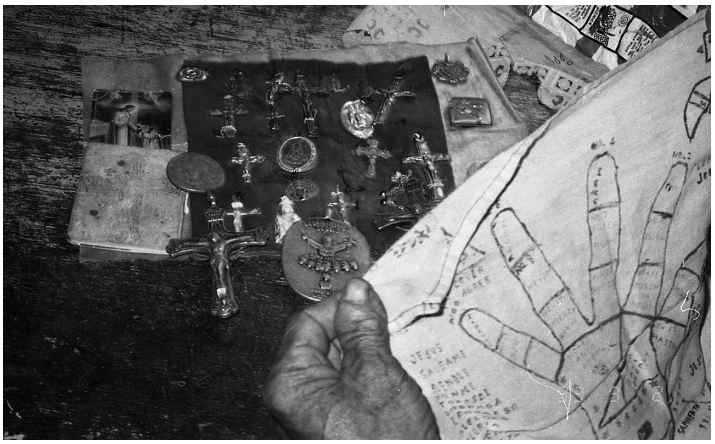
郡立病院のタイ式医療科で胃腸に効くと言われるウコンの粉末をカプセルに詰める呪術師（右）（2010 年８月、タイ・チェンマイ県、飯田淳子撮影）。

が呪術だという。さらに、近代による呪術の活性化というモダニティ論を再考し、理不尽さや不可解さの増大によって必然性に揺らぎが生じたときに活性化する呪術の根源的力に視角を開こうとしている。

偶然性の再必然化という呪術の作用は、未詳の必然性を顕在化させ法則や理論に定位させる科学の作用とは対照的に捉えられる。そして、「いかにして／なぜ」という顕著な形での対比とも共振するような議論が展開された。このような観点から、まずは呪術と科学の間に生じる諸事象を検討し精査するところから共同研究が始動したのである。

宗教的回心の呪術論

いまひとつの検討課題として、呪術と宗教の関係についても今後の展開をめざしている。「信じる」という心の作用にかんしても、呪術のように技術・実践をあてにして信じる場合と、超越的なある種の存在を想定してそれを信じるということの間には共振と齟齬が生じるはずだ。先の「なぜ」に対する答えとしての呪術という指摘も、神に対して義なる人間がなぜ不幸に苛まれるかを主題化した旧約聖書の物語「ヨブ記」のような苦悩の「神義論」として考えれば、科学との対比より宗教との隣接面に焦点があてられることになる。そして、呪術における「なぜ」と、神義論における「なぜ」はどのように関わるのか、というさらなる問いも生まれる。



呪術師が施術に使用する聖具（1993 年 9 月、フィリピン・バンタヤン島、川田牧人撮影）。

このように呪術と宗教がお互いに隣接しながら意味を錬磨させる現象は、宗教的回心のケースにおいても見いだされる。たとえば有名なパウロの回心という新約聖書中のエピソードで考えれば、「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」というパウロを直撃した言葉は、光とともにパウロを襲い、馬上から転倒させるほどの威力をもっていた（『文語訳　新約聖書』2014: 321）。武器として力を帯びる言葉の威力は呪術の属性としてしばしばとりあげられるが、宗教的回心の場面においても重要な要因としてあげられる。このことは、宗教領域の事象にも呪術的な実践が見いだされることを指摘するにとどまらない。同じ言葉の衝撃であっても、個人の経験を整序化したり他者への伝達（いわゆる伝道）という歴史的回路をへたりすることによって、宗教としての意味がせり上がってくる。と同時に、呪術の側にも、実践としての呪術が共有されたり継続したりしていくのはいかなることか、という問いも生じさせる。

かつて、呪術・宗教・科学という三すくみの図式は、技術と信念の対比とか、普遍と特殊の相違であるといった分断的な分類として言及されることが多かった。本研究においては、両者もしくは三者がどのように接触し合うか、そしてその接触によってそれぞれの領域にいかなる共奏が生まれるかといった観点からの再検討もこころみたい。

〈呪者〉の肖像

さいごに、本研究から生み出される可能性を展望することで、この小文をしめくくりたい。初年度がやっと終わったところで成果というのも気の早い話かもしれないが、冒頭に書いたとおり、本研究はこれに先んずる共同研究での問題意識を発展させたところも多々あり、また関連するいくつかの科研費研究でも議論を重ねてきた経緯もある。そこから立ち上がってきたひとつの関心として、「当事者」の立ち位置を離れては成り立たない人類学的呪術研究の基本的ビジョンそのものがあり、それを形にすることを検討している。

呪術という事象は当事者抜きには語れない。クライアント側が持ち込む個別の事情がそのケースの性格を大きく左右するのは当然であるが、それと同時に、施術する側の人びとの個性が事象に大きくかかわっていることが多い。ここでいう〈呪者〉とは、呪術的な施術を行なう人びとはもちろん、説法や祈禱など言葉の力によって納得と共感を与える者や、薬剤処方や身体技法などの実践を司る者など、ゆるやかな裾野をもってイメージされる。われわれがフィールドで出会う具体的人物としての〈呪者〉は、ユニークな性格、旺盛な好奇心、抜きん出た行動力など、共通する性格をもつことも次第に見えてきた。にもかかわらず呪術研究における〈呪者〉は、たとえばシャーマニズム研究において個々のシャーマンが具体的にとりあげられるほどには意識的に照らし出されることはなかったように思われる。

フィールドワーク中、われわれが日常的にふかく交流する相手であることを考えればその人となりを浮き彫りにすることは意義のあることだが、それだけにとどまらず、具体的個性として〈呪者〉を描き出すことによって、呪術そのものへといたる記述が開かれることは、呪術研究の現在にとっても課題である。かつて複数の人類学者による「わがフィールドのインフォーマントを語る」的な論集があったが（Casagrande 1960）、それにならえば、さしずめ「わがフィールドの〈呪者〉を語る」という趣向となろう。

【参考文献】

白川千尋・川田牧人編 2012『呪術の人類学』人文書院。
浜本 満 2014『信念の呪縛』九州大学出版会。
―― 2014『文語訳　新約聖書』岩波書店。
Casagrande, Joseph B. (ed.) 1960. In the Company of Man: Twenty Portraits by Anthropologists. NY: Harper & Brothers.

かわだ まきと

成城大学文芸学部教授。専門は文化人類学、宗教人類学、東南アジア民族誌。著書に『祈りと祀りの日常知 フィリピンビサヤ地方バンタヤン島民族誌』（九州大学出版会 2003 年）、編著に『呪術の人類学』（白川千尋共編 人文書院 2012 年）など。